

批評・紹介

東方史論叢 第一

(北方史專號)

昭和二十二年七月二十日 丹波市 養徳社刊
B 5 判 三〇九頁 價 一八〇圓

この新發行の論集は、羽田博士の序文によると、「曾て滿蒙史論叢に於て活躍した諸氏が中心となつて、その分野を擴大して新たに發刊」したものださうである。この數年の間に『滿蒙史論叢』四卷ののこした足跡は世に隠れもないところ、その後身である本論叢が、將來それにもまさる寄與を學界になさんことを祈つてやまぬ。

こんど新刊の第一號は『北方史專號』となつてゐて、宮崎・岡崎・田村三氏の力作が收められる。一つ一つ紹介しよう。

宮崎市定『清朝に於ける國語問題の一面』

清朝は滿洲人が漢土にはいつて立てた漢風の王朝であるから、その政府はそもその始めから言語の疏通といふ厄介な問題に當面した。ところが、時がたつとともに、清朝では、政治的に優位にある滿洲人の方が、言語の面では、いはゞ敗退して、滿洲人の方が漢語を用うることによつてこの問題が

解決し、清朝一代を通じて民族相互の摩擦は一應は目立つた問題とはならなかつた。その間の文書の取扱ひ方の上にあらはれた國語問題、すなはち文書翻譯の問題を主題としながら、政權の所在を追求して、内三院、内閣などの近世的君主に附屬した機關の變遷から、清朝の政治機構を特色づける軍機處の機能の解釋に及ぶ興味深い研究である。

一つの民族がその政治的の運命のために母國語を忘れるといふ現象は史上にその例がないでもない。だが、清朝では支配者の方がさうなつたのであるから大變奇妙である。私は先年滿洲語を學ぶ間に、漢語を翻譯するために多くの拙劣極まる官製人造語を作るほどにだんだん滿洲語が生彩を失つてゆく過程に一寸興味を覺えたが、私の不敏と怠惰から、立ち入つてかう言つた問題を調べる手がかりが見つからないまゝに一向勉強もしなかつた。宮崎博士によつて文書の取扱ひ方といふことを手がかりに斧鉞が加へられたのを見て、十年前の不勉強を深く恥ぢるとともに、その慧眼に敬服の念を禁じ得ない次第であり、また問題の内容には一通りならぬ興趣を覺える。本文によれば、康熙十年（一六七一）には滿洲人官吏は通譯を必要とせぬ程度まで一般に漢語ができる様になつてゐたといふ。順治帝の入關（一六四四）から三十年を経過してゐない。かれらの漢語習得の早さは大きな驚異であり、またそのためには、かれらは生活様式から變へてかゝつて苦心を拂つたものであらうから、申さばこの期間は民族の苦惱の時期ともみられよう。もし、著者の説く如く、國語問題にお

ける成功が、清朝をして征服王朝としてはもつとも長い命脈を保たしめたものであるならば、この時期の滿洲人の動きといふものは清朝史の鍵でなければならなくなる。この研究の中では淡々と扱はれたその間の経緯は、將來、何人かによつてさらに追究せられねばならぬ問題であらう。

清朝史を扱つた研究はすこぶる多い。しかし、そのほとんどすべては、近代史として清朝を扱つたものでなければ、滿洲族の興起を調べた研究が若干あるだけであつて、清朝を一つの征服王朝として扱つた研究は極めてまれであつた。もつと説明を加へれば、清朝は滿洲人が漢地にはいつて立てた漢風の王朝であつて、すなはち、滿洲人と漢人によつて成立つてゐる國であるから、その第一の問題は、如何に兩民族が結びついてゐるかといふことにならなければならぬ。かういつた兩民族の接觸の面をとり上げた研究は極めてまれであつたと思ふ。異つた民族が接觸してまづ出會ふのは言語の問題であるから、この研究はもつともオソンドックスな征服王朝史の研究と言はねばならないのであつて、この點で、特異の地位をもつべき研究である。

岡崎精郎『唐代に於ける党項の發展』

題名の示す通り唐代を扱つた史籍の中から党項に關係した記事を細大となく搜集してできた著作である。党項族は、衆知の通り、のちに西夏國をたてる。だから唐代におけるその系譜を探ることは唐朝の域外史といふ以外に西夏の建國前史といふ意味をもち、本篇もさういふ意圖で書かれたものの様

である。

西夏は党項族が河西にたてた國である。だからその建國前史には、建國前の党項史と建國前の河西史との二つの面がある。著者は、いまは、その前者の立場をとつたわけである。

この立場をとることによつて、著者がその意圖する所をどれだけ達成し得たかといふことは、本篇が漢土における唐朝の終末の時を以て限りとせられてゐるために、著者の企圖が充分に現はれて居らず、従つて、その判斷はこれにつぐべき作が出てからでなければ下すことができない。

田村實造『遼宋交通資料註稿』

一國の記錄にはその國人自體の記錄と他國人の記錄とがある。その後者には、時には見當ちがひのあるのは免れ難いけれども、しばしば前者の缺を補ひ得るばかりでなく、自國人の氣づかぬ點の記載などあつて珍重せられることは、東西古今にわたつて常にみる所である。遼人はその記錄をのこすことと極めて少く、正史の『遼史』さへ、その編輯のときには『資治通鑑』や『舊五代史』、『契丹國志』まで使はねばならなかつたほどであるから、宋人の遼國に關する記事はとくに珍重せられねばならぬ。さういふ記錄の中で、宋人が遼國に旅行してその見聞を書き留めたものとしては、胡燏の『陷虜記』(九四七—五三)、路振の『乘輅錄』(一〇〇九)、王曾の『行程錄』(一〇一三)、薛映らの『行程錄』(一〇一六)、宋綬の『行程錄』(一〇二〇)、孫坦・陳襄らの『使遼語錄』(一〇六七)など六種がいま傳はつてゐる(これらは、いづれも

『國學文庫』四七の『契丹交通史料七種』に收められてゐて、手輕に見ることが出来る。もつとも、これだけの内で第三、四、五の行程記は、いづれも三百字から千字足らずの簡單なもので、記載が詳しく興味ある内容をもつたものは胡嶠のもの、と路振のものとの二つであり、また最後のものは紀事の長い割合に内容に精彩はないけれども、他のものよりずつと後の時期のものである點で注目せられてよいものである。

本稿には、右のうち、『乘記錄』と『陷虜記』と、すなはち、もつとも重要な二つが『遼宋の交通と遼國內における經濟的發達』の著者によつて親切な註解が施されてゐるのである。後進のためにはまたとない道標である。

この十年ばかりの間の日本における滿洲史の研究の盛況は眼ざましい限りであつた。そして、この一兩年の間に、いままで滿洲史の研究に携はつてゐた俊秀の多くがそれぞれの事情からその研究が打切られてゐて、おのづこゝに一つの時期が區切られる様な形勢にある。この部門の研究が衰運に向ふことは致し方ないとして、こゝまでの水準に達したこの學問の傳統をどうして維持するか、といふことは、さしあたつての重要な課題である。本稿の様な、滿洲史の重要な史料に、その専門家が、いまままでに達した水準の知識の最高の能力を發揮して註解を施しておく、といふことは、まさに右の課題に對するもつとも適切な解答であらう。さういふ意味でこの試みは大いに歡迎せられねばならない。聞く所では、この註解は他の諸記録にも順次に及ぶ由であり、ことに『松漠

紀略註解』など、もし本當に出るならば、これは旅行記以上に期待せられるものである。

最後に、言ひたいことを言ふと、かういふ註釋は本文の理解に資するための最良の説明がその理想であるべきだから、遼の中京などの説明には、たゞ文章の説明に止まることなく、地圖や圖版が豊富に用ゐられて然るべきであらう。説明を読んでゐると、もともと、さういふ意圖であつたらしい痕跡がある。が、これを缺くことは現在の滿洲史學の水準を示す所以でない。

もう一つ、『乘輅錄』のなりたちについて、私の名が引き合に出て、これは續談助系の本と事實類苑本と合せることによつて完全なものになるとの説明がある(十一頁)。本誌一卷六號で私がこの『乘輅錄』に觸れたときは、充分の自信がなかつたから、いささか曖昧な書き方をしたが、いま考へ直してみて、やはり、この二種を合せて『乘輅錄』は完全には復原できないであらう、と言ひたい。すなはち、事實類苑本は、上京及び中京に關する部分の忠實な寫しである様に思はれるが、續談助本は行紀全體の節略本である。途中の紀行にも、もつとゝいろいろな記事がもとはおつたものであらうと思像する。さうだとすれば、原形はほぼ推測し得ても、完全な復原はできないわけである。

〔藤枝 晃〕